

帝京短期大学ユニバーサル・デザイン・プロジェクトの実践

－専攻科こども教育学専攻「障害児保育」の授業より－

五十嵐 元子

帝京短期大学こども教育学科

Classroom Practice of Universal Design Project at Teikyo Junior College

－ From a class on childcare for children with disabilities
in the Department of Child Education －

Motoko IGARASHI

Teikyo Junior College (Department of Early Childhood Education)

Abstract

This report is a summary of the "Teikyo Junior College Universal Design Project" undertaken by students of the Child Education major in the "Care of Children with Disabilities" class in academic year 2022. Universal design refers to the design of environments that are easy for anyone to use, and has become familiar to us as "anyone can use the restroom" and "station slopes". Its historical background and ideas are also important for the care of children with disabilities, and the aim of this project was to deepen the students' understanding of "universal design" through their participation in this project. The students formed groups of three to five members and began by surveying the living environment at their own junior college. In the course of group discussions, the students began to broaden their perspective to designs for public spaces outside of the college and for practical training sites, and they also began to imagine the difficulties faced by those considered to be minorities, such as those with disabilities. In this project, the first 15 minutes of each class were allocated for group activities to provide an opportunity for continuous dialogue. This seemed to make it possible for the students to notice the differences in perceptions and perspectives with their peers and further deepen their thinking, even when dealing with a single theme.

Keyword : Universal Design, Care of children with disabilities, dialogue

要旨

本報告は、2022年度専攻科こども教育学専攻の学生が「障害児保育」の授業で取り組んだ「帝京短期大学ユニバーサル・デザイン・プロジェクト」についてまとめたものである。「ユニバーサル・デザイン」とは誰もが使いやすい環境のデザインで、「誰でもトイレ」や「駅のスロープ」など私たちの身近なものとなっている。その歴史的経緯や考え方は障害児保育にとっても重視されており、今回、このプロジェクトへ参加することによって、学生が「ユニバーサル・デザイン」について見解を深めていくことをねらいとした。学生は3～5名でグループを作り、自分たちの短期大学における生活環境を調査するところから始め、最終的にユニバーサル・デザインを考案し、資料を用意して発表会に臨んだ。グループで話し合っていくなかで、本学以外の公共空間や実習先のデザインにも視野を広げ、さらに障害などのマイノリティと呼ばれる者たちの困難も想像するようになっていった。本プロジェクトは、授業の冒頭15分間を毎回グループ活動に割り当て、継続的に対話する機会を設けた。そのことにより、学生たちが一つのテーマを扱っていても、仲間とその捉え方や視点の違いに気づき、さらに考えを深めていくことを可能にしたと思われる。

キーワード：ユニバーサル・デザイン、障害児保育、対話

I. 問題・目的

ユニバーサル・デザインは、「身体能力の違いや年齢、性別、国籍に関わらず、すべての人が利用しやすいようにつくられたデザイン」¹⁾と言われ、私たちが日常生活を送るなかでも身近なものになった。駅にある「スロープ」や「誰でもトイレ」などはその一例であろう。ユニバーサル・デザインを考案したのはロナルド・メイスで、彼は幼少期に罹患した病気が原因し酸素吸入器と車いすを使って生活していた。¹⁾1959年頃から北欧を中心に「ノーマライゼーション」^{注1)}という考え方が広がり、同時期にアメリカでも「バリアフリー」という用語で、障害者が日常生活

や社会参加を困難にしている障壁（バリア）を取り除くといったことが進められてきた。中でも物理的な環境の改善に焦点が当たり、既存の物に修正を施すようになっていったが、そのことにロナルド・メイスは障害者への特別な意識を他の人たちに持たせてしまうことに疑問を持ち、「誰もが」利用できるようなデザインを考えることに至ったとされる。²⁾

これらの考え方は、保育者養成における「障害児保育」の授業において、障害や配慮を要する子どもを支援する環境を考えるとときに知っておきたい基礎概念として位置づいている。学生が保育者になったとき、障害がある子どもや配慮を要す

る子どもと必ず出会う。その際に、そのような子どもだけでなく、その場にいる子ども一人ひとりを視野に入れ、安心かつ安全で心地よく過ごせる環境づくりが求められる。それは、単に障害特性に応じた配慮を機械的に行うというものではない。目前にいる子どもたちがどのような困難を抱えているのかを考えると同時にその他の子どもたちや私たち大人も含め、対話を通じて生活環境を共に創出していくものであろう。

このような問題意識のもとに、2022年度前期の「障害児保育」の授業では、ユニバーサル・デザインの基礎的な知識を伝達するだけでなく、学生自身が短期大学の生活環境を見つめ直し、多様な学生が過ごすことを視野に入れたユニバーサル・デザインを主体的に計画するプロジェクトを立ち上げた。題して「帝京短期大学ユニバーサル・デザイン・プロジェクト」である。本報告はこのプロジェクトにおける授業実践を紹介する。

II. 授業の位置づけ

本学における「障害児保育」は、障害や発達に困難がある子どもに関する基礎的な知識を身につけ、子ども理解に重要な視点と豊かな園生活を送るための工夫を学ぶことを目的としている。保育園や幼稚園を想定すれば、障害児、発達に困難がある子どもを含むクラス全体を視野に

入れる必要があり、子ども同士の関係性や一人ひとりの持ち味が活かされるような保育にも言及する。2022年度の15回の授業は表1のように展開された。

授業を進めていくうえで重視していることは学生同士の対話の時間である。教員が一方向的に教授するのではなく、学生自身が対話を通して、多様な見方・捉え方を知り、自分でどのような保育をしたいと思うのかを考えられるようにしている。そのため、例年、テーマを設けてグループで活動する時間を毎回の授業で設け、最終回にその活動内容を発表するようにしていた。

2022年度は「帝京短期大学ユニバーサル・デザイン・プロジェクト」と題し、本学の構内環境を調査し、自分たちと多様な背景を持つ学生がどのようにしたら快適に過ごすことができるのかを考え、その改善デザインを計画することをグループ活動とした。

表1 2022年度障害児保育 15回の授業内容

授業回数	授業内容
第1回目	授業のねらい・進め方について WHOの障害概念から障害のとらえ方・考え方を学ぶ
第2回目	障害児保育の歴史と形態について学ぶ 「学校をデザインする」(NHK番組・バリバラ)の視聴
第3回目	知的障害について(1) 知能指数・障害の程度に関する考え方を学ぶ
第4回目	知的障害について(2) 知的障害・ダウン症の子どもの特徴と保育を考える (事例検討・グループディスカッション)
第5回目	自閉スペクトラム症について(1) 自閉スペクトラム症の特徴を知る(講義+VTR視聴)
第6回目	自閉スペクトラム症について(2) 感覚の困難について考える
第7回目	自閉スペクトラム症について(3) 保育の事例を通して、自閉症スペクトラムの子どものいるクラスの仲間関係について考える(事例検討・グループディスカッション)
第8回目	ADHDについて(1) ADHDの特徴を知る(講義+VTR視聴)

授業回数	授業内容
第9回目	ADHDについて(2) 保育の事例を通して、ADHDの子どもがいるクラスの仲間関係について考える(事例検討・グループディスカッション)
第10回目	「ユニバーサル・デザイン・プロジェクト【中間発表会】」
第11回目	LD児の困難を知り、その支援や保育を考える 視覚障害・聴覚障害の特徴を知り、その支援や保育を考える(疑似体験ワーク)
第12回目	肢体不自由の特徴を知り、その支援や保育を考える
第13回目	医療的なケアが必要な子どもや外国にルーツがある子どもなど、子どもに関わる障害や発達について理解を深める
第14回目	障害がある子どもの保護者の障害受容を考える 専門機関の特徴を知り、連携の在り方を学ぶ 小学校との連携や接続について考える 個別支援計画を知る
第15回目	「ユニバーサル・デザイン・プロジェクト」発表会

Ⅲ. 授業実践・グループ活動の手続き

1. 導入

<初回授業>「障害とは何か?」というテーマで障害概念について、WHOによる社会モデルやバリアフリー、ユニバーサル・デザインについて概説し、プロジェクトの説明を行った。その後、学生に自主的にグループを作りグループ名を考えるように指示し、授業の冒頭15分をグループ活動に当てることを伝えた。グループノート(図1)を配布し、毎回、何を調べて話し合ったのかを記し、授業後教員に提出するように促した。

<第2回授業>「学校をデザインする(バリバラ・NHK番組)」の動画を視聴後、学生に帝京短期大学の構内図をコピーし、構内における変えたほうが良いところについて、誰がどのような困難を抱えやすいのか?を考えながら、グループで調査するように促した(図2)。また、発表に際しては、夢プランと現実プランの2つを考え、その予算も立てるように助言をした。

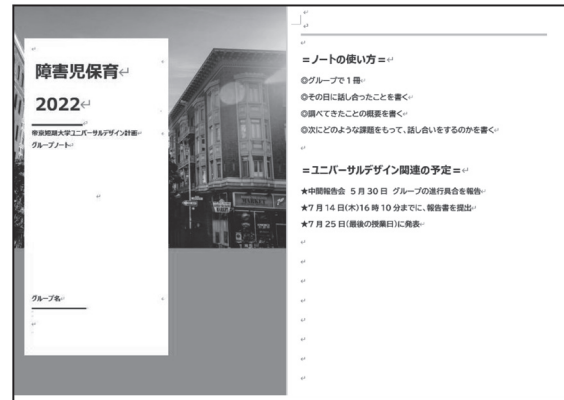


図1 学生に配布したグループノート

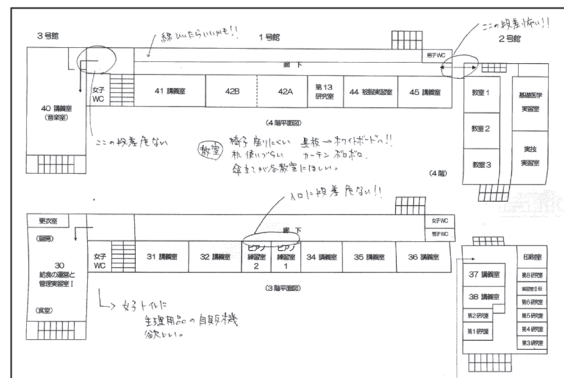


図2 構内マップ

2. 中間発表会

第10回目の授業でこれまでにグループで調べたことを発表する会を設け、調べたことを簡単にまとめ、資料を用意するように指示を出した。

3. プロジェクト発表会

第15回の授業で、グループで調べたことをPowerPointで資料を作成し発表した。発表会3日前までに資料を教員に提出するように促し、発表会当日、冊子にして学生に配布した。発表会では感想用紙を配布しグループごとに発表に対する意見や感想を記入するよう求めた。また、発表会当日は愛知県立大学教育福祉学部三山岳准教授^{注2)}を特別ゲストとしてZoomで参加してもら

い、コメントしていただいた。その際、プロジェクトに Zoom の画面を映し出し、学生にも三山氏がコメントする姿を見えるようにして、双方向的にやりとりができるように工夫した (図 3)。



図 3 Zoom 画面映写の様子

IV. 授業の様子

グループは 5 つ形成され、「C1 魂」「しんちゃん」「漢」「トリッピー」「みみまじこ」と命名された。第 2 回と第 3 回の授業では、構内マップを手にグループで自由に学内を探索し、自分たちや障害など社会的障壁がある人にとって不便な環境をノートに記入するように促し (図 4)、第 4 回以降は各グループに調査活動を自由に行うように指示した。第 2 回・3 回で出てきた改善ポイントは表 2 にまとめたとおりである。

表 2 初期に出てきた学内環境で改善したいところ

場所	改善したいところ
玄関	正面玄関 スロープが自転車のしかない
	学生ホール側のスロープ、搬入用で車椅子だと急で怖い
階段や段差	エレベーター・エスカレーターがない
	学生ホールとピアノ室 1.2 の入り口に段差がある
	階段の段差が見えにくい
教室	各階に○階という表示が小さくわかりにくい
	ピアノ室 1.2 の入り口に段差がある
	机の間隔が狭く、長机が使いづらい
	椅子が座りにくく、姿勢が崩れやすい
トイレ	黒板に書くチョークの粉末が喘息に良くない
	カーテンがボロボロで、プロジェクター見えない
	狭い・和式が多い・多目的トイレがない
学校全体	女子トイレに生理用品自販機がほしい
	蛇口をセンサー式にしてほしい
	音声ガイドや点字ブロックがない
	学校全体をカラフルにして各階で色分けする
	学生全員分のロッカーがない

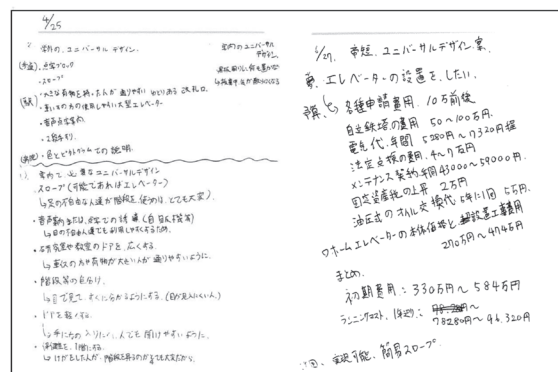


図 4 学生のグループノート記入例
毎回、グループで話し合った内容を記載する。

1. 中間発表会

中間発表会で配布されたグループの資料の一部を図 5 に示した。自分たちが不便を感じ改善したいところだけでなく、障害がある人たちの立場にもなって考えていったところが特徴的であった。例えば教室内の音が反響し、聞こえづらいために防音用の壁を設置する (自分たちも、音の過敏がある者も)、光が差し込みやすいところではプロジェクトが見えにくく、かつ眩しさでいてもたってもいられない可能性があるため (自分たちも光の過敏がある者も)、カーテンを黒にする、ピアノ室や 34 番教室の入り口の段差に躓きやすいために段差プレートなどを設置するなどが挙げられた。ほとんどのグループで写真を撮影し、自分たちが注目したところが他の学生にも分かりやすいように明示していた。

中間発表を受けて、最終回のプロジェクト発表会に向けて、ユニバーサル・デザインの基礎概念を改めて調べ、中間発表での調査内容と見比べてみることや学校外でもユニバーサル・デザインを探してみることを教員から提案した。



図5 中間発表会での資料や PowerPoint

2. プロジェクト発表会

学生たちは、中間発表会を経て、グループでユニバーサル・デザインの7原則などに触れ、構内や公共空間について改めて見直したようである。プロジェクト発表会では、帝京短期大学の構内環境に関する夢プラン・現実プランとその予算をまとめ、最後に今回のプロジェクトに参加して学んだことや感想を述べていた。

次に各グループがどのような内容を発表したのかを抜粋して記載する。実際には多くの内容が発表されているが、紙幅の関係上、そのグループの特徴的だったところだけをまとめた。

「漢」グループは、黒を背景としたスライドを作成し、見た目にも誰にでも分かりやすいものを使って発表していた。主に階段付近に注目し、手すりが部分的であり、各階の表示が分かりづらいなどの不便さをあげ、手すりをつける、各階の表示の仕方を分かりやすくするなどを取

りあげたところに特徴があった。また、視覚障害がある者にとっては段差が見えづらいので、階段を色分けするといった案も出ていた。なお、手すりの作成を業者に依頼した場合、インターネット検索から直階段：約4～7万・折り返し階段約8～10万かかることを調べ上げていた。

「トリッピー」グループは、ユニバーサル・デザインの7原則と社会にあるそのデザインを紹介した後、本学の構内の変えたいところを取りあげていた。廊下は動線を安定させていくために、センターラインを引いたり、視覚障害者のための点字ブロックの設置があげられている。また、「漢」グループと同様に階段に注目し、現実プランとして「おんぶしたり、荷物を持つ」といった困っている人がいたら自分たちで助けるということを目指した点で特徴的であった。環境を変えるだけでなく、私たちの他者に対する意識を変えていくことの重要性を語っていた。

「みみましこ」グループは、独創的なキャッチフレーズを立てて、それぞれ改善したいところやその思いを分かりやすく伝えていたところに特徴があった。特に教室の環境に目を向け、黒板を2枚式のスライドにすることを提案した。自分たちが授業を受けていて板書が間に合わなかったという経験に基づき、書字が難しいとされるLDの学生たちも想定したものだった。また、「カーテンはBlack」というフレーズでも分かるように、本学のカーテンの色と遮光性の低さを取りあ

げた。カーテンの色が刺激となって気が散りやすくなるといった ADHD や自閉スペクトラム症を想定したとき、自分たちにも快適であることに気づいていった。さらに予算書を作成し、計画の実現可能性まで言及した。(巻末資料)

「**チームしんちゃん**」は、町中のユニバーサル・デザインのなかに、シャンプー・リンスに凹凸や点字によってその種別等が分かりやすくなっていることに報告した。それを聞いていた学生が「ああ〜」と納得するような声があがり、自分の身近なものなかにデザインの工夫があることに改めて気づかされたようである。また、構内の改善点では、段差を取りあげ、スロープ設置には17,000円以上かかり、角材を買ってきて加工すれば300円から購入することができるので安価で済むことを伝えていた。耐久度から考えるとどうなのか?という疑問も持ったそうだが、身近な物で工夫できることのひとつとして提案した。

「**C1魂**」は、1枚のスライドに分かりやすく、改善したいところについて、その場所と誰が不便なのか、どんなところがまずいか、改善点、夢プランと現実プランをまとめていた。特に2階廊下のドアについて報告したのはこのグループだけである。2階廊下のドアは、目が不自由な人、車いすの人、手や足を怪我している人にとっては、扉が重いため、自分で開けて通れない、目が不自由な人はドアにぶつかってしまうなどの困難さをあげていた。その他にも自販機をあげて、車い

すの使用者、目が不自由な人、身長が低い人にとって使いづらいといったことを挙げ、点字や音声案内、ボタンや金貨の投入口の位置の工夫を挙げていた。

グループで共通していたことのひとつにトイレがある。多目的トイレがないことや和式が多いことなどが挙げられていた。多目的トイレは障害者だけでなく、LGBTQの人たちにも大きな問題であることが考えられていた。

3. プロジェクト発表会後

プロジェクト発表会後は特別ゲストの三山氏からコメントをいただいた。具体的には次の通りである。「①自分たちが生活する短期大学という環境を考えると、身近な(駅や道路、公衆トイレなど)環境へと視野を広げていくことで、今まで気づけなかったことを気づけるようになったこと②また他の人の立場に立って考えてみると、環境に対する感じ方や困難のあり方が違うんだということに気づけたこと、③これらは保育者になったときに、目の前にいる子どもを前に、どのような保育環境を作っていけばいいのかを考えることにつながっていくと思いました。そのときに、みなさんの感性や感覚から考えを広げられることがとても大事なんだと考えます。」

15回目の授業が終わった後、三山氏と担当教員である五十嵐からも各グループにコメントを添えた動画を作成し、学生に配布した。

各階の〇階というのが分かりづらい

- この問題を解決するには各階の足元もしくはきりきった正面の壁にペンキで今何階にいるのかを描く。費用：業務用白塗料10900円、ペンキ刷毛153円

1F



図6 「漢」グループ

②廊下

- ・点字ブロックをつける
- ・手すりを付ける
- ・廊下の幅を広くする
- ・センターラインを引く
- ・障害物を置かない



現実プラン

- ・ビニールテープなどでセンターラインを引く
- ・障害物を置かない

夢プラン

- ・点字シートを引く
1マス¥1000
- ・手すりをもう片方にも付ける
350cm 約¥4000

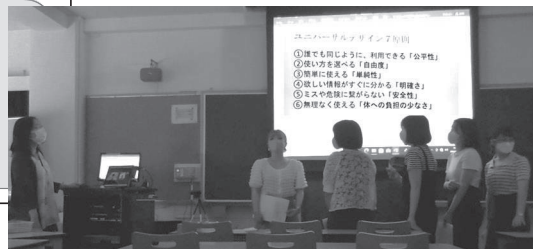


図7 「トリッピー」グループ

カーテンは絶対。BLACK。

- ・カラフルな色彩に目がいってしまう…
- ・チカチカする…



図8 「みみましこ」グループ

現実プランNo.1

- 教室の段差を無くす
一段差を無くすのは、スロープをつけるのが一般的ですが、設置型でも、17,000〜20,000サイズの間に限りもありません。私たちは角材を斜め半分の断面（二角）に切り、段差に合わせて簡易的に段差を無くすことが出来ることを考えました。また、角材は300〜購入可能であり、実現しやすいと考えました。
- 黒板をホワイトボードにする
一現在、本学には各教室に1つホワイトボードが設置されています。これを利用することによって、視覚障害を持つ人が見やすくなるのだと考えました。また、喘息や気管支に疾患を抱えている人もチョークの粉が舞いにくく、健康への配慮にも繋がるのだと考えました。
- 教壇を無くす
一教壇を無くすことによって、教室を広く使えようと考えました。コロナ禍の為、座席数に限りがあります。その間隔を広くすることも教壇を無くすという考えになりました。また、教壇があることによって、怪我をする可能性も多くある為、教壇を

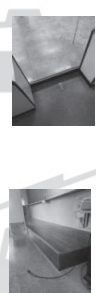



図9 「チームしんちゃん」

2階廊下のドアについて

誰が不便？

- 目が不自由な人
- 車椅子の人
- 手や足を怪我している人

改善点

- 自動ドアにする
- ドアを無くす
- 軽く押しで開閉ドアにする
- ボタンで開閉できるドアにする

どんな所がまずいか

- 自分で開けて通れない
- 目が不自由な人はドアにぶつかってしまう

“夢” 自動ドアを設置する

“現実” 開けて放しにする

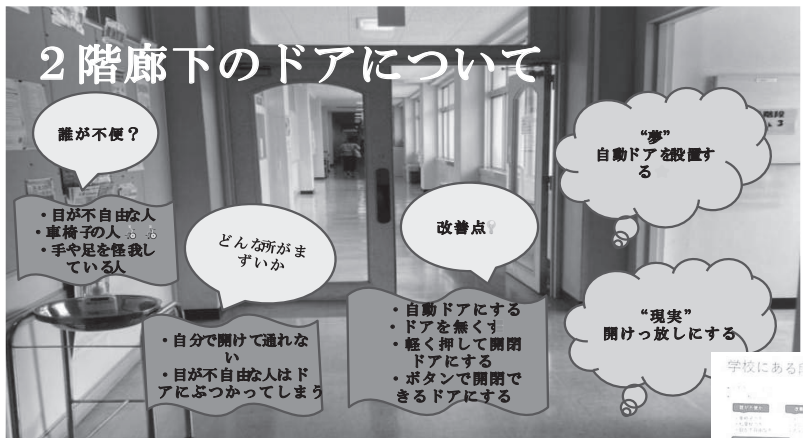



図10 「C1魂」グループ

三山先生から

①自分たちが生活する短期大学という環境を考えると、身近な（駅や道路、公衆トイレなど）環境へと視野を広げていくことで、今まで気づけなかったことを気づけるようになったこと。

②また他の人の立場に立って考えてみると、環境にたいする感じ方や困難のあり方が違ふんだということが気づけたこと。

これらは保育者になったときに、目の前にいる子どもを前に、どのような保育環境を作っていけばいいのかを考えることにつながっていくと思えました。

そのときに、みなさんの感性や感覚から考えを広げられることがとても大事なんだと考えます。ありがとうございます！

五十嵐から

各グループが協力して、帝短を少しでも過ごしやすいようにしたいという思いを持ちながら、コツコツと調べた結果、ユニバーサルデザインの基礎知識と合わせながら、考えられるようになったんだと成長を感じました。さらに、現実プランでは、各グループの味が出ていて、様々な工夫がまだできることを気づかされました。ありがとうございます！

みなさんと授業を作ることができて、しあわせでした♡

総評

みなさんの発表全体へのコメントです。

チームしんちゃん

短期大学の環境を見直すなかで、自分たち自身の身体をしっかりと使って感じたこと、体験から導き出していますね。教科書的な知識では思えないようなことをよく発見できていると思いました。（三山）

教壇を失くすなどの身近でできることから考えているところがとても素敵でした。私も教壇に昇らないと不安がありますが、よく落ちます；気づいてくれてありがとうございます！（五十嵐）

この発表を通じて、私が最も感じたことは、ユニバーサルデザインだからこうしよう！とあるものを押し付けるのではない！と皆さんが共通して考えていたのではないだろうか？ということです。

生活のなかでその人や自分にとってどうなんだろう？と考えるところから、ユニバーサルデザインをクリエイティブにしてみました。そこが最もこの授業を通して、私が伝えたかったことです。また、万人にとって良いからと言って、本当にそうとは限らない、それに当てはまらない人も必ずいるし、万人にだってそれぞれ違いだっている。そうした一人ひとりの意見に耳を傾けながら、対話を通じて、私たちの私たちがのデザインを作っていくとしたら、それはなんだかドキドキワクワクします。皆さんなら目の前にいる人の声を聴けるはず…。

最後の授業、みなさんと一緒に作ることができたことを誇りに思います。いがらしもとこ

とりっぴー

ユニバーサルデザイン7原則

- ①誰でも同じように、利用できる「公平性」
- ②使い方を選べる「自由度」
- ③簡単に使える「単純性」
- ④欲しい情報がすぐに分かる「明確さ」
- ⑤ミスや危険に繋がらない「安全性」
- ⑥無理なく使える「体への負担の少なさ」
- ⑦使いやすい広さや大きさ「空間性」

ユニバーサルデザインとは何か？や原則を改めて捉えることで、自分たちの調査結果も分かりやすく、語を展開するようになり発表出来たことと感心しました！！（三山）

最後のまことに「状況を見て手を差し伸べたい」「その方の目線に立って…」という文言がありました。環境は物だけではない、人もだということも思い起こさせる内容でした！！（五十嵐）

図11 教員から学生へのコメント（スライド例）
PPTから音楽を挿入して動画を作成した。

IV. まとめ～対話の大切さを学生とともに学ぶ～

1. 学生の感想文から

授業後の学生の感想文をユーザーローカル テキストマイニングツール（<https://textmining.userlocal.jp/>）によって分析を行った。^{注3)} 単語出現頻度とワードクラウド（複数出現した単語の重要性を示すスコア^{注4)}によって文字の大きさによって図示）は表3と図12に示した。

「ユニバーサル・デザイン」をテーマにしてワードクラウドを見ると、「暮らしやすい」「使いやすい」「生きやすい」といった形容詞、「エレベーター」「改善」「不便」「困難」「改善」「障害」「自分たち」「社会」「視点」「15回目」といった名詞、「話し合う」「出し合う」「学ぶ」「運ぶ」といった動詞が目立ち、それだけこの感想文では重要な語であることが示された。

これらは学生が、ユニバーサル・デザインの概念のなかでも「自分たちや障害者などが不便や困難に感じているところを改善し、暮らしやすく・使いやすい・生きやすい環境づくり」に着目したことが推察された。

エレベーターのスコアが高かったのは、本学にエレベーターが設置されていないことが影響し、多くの学生が感想文で指摘したのだと思われる。感想の中には「緊急に担架で病人等を運ぶときに階段を利用する危険性」をあげ、エレベーターの設置の重要性を述べていた。

もう一つの特徴は、15回目の授業での

発表やグループでの話し合いで、考えや改善点を出し合うことで、様々な視点や発見を得たことが考えられた。

表3 語のスコアと出現頻度

■ 名詞	スコア	出現頻度
ユニバーサルデザイン	288.43	36
不便	19.34	16
障害	13.41	13
社会	4.91	11
改善	5.26	10
エレベーター	10.61	9
自分たち	9.14	9
様々	6.62	9
授業	1.84	9
学校	0.62	9
グループ	1.71	8
発表	1.43	8
視点	4.47	7
困難	5.63	6
計画	1.87	6

■ 動詞	スコア	出現頻度
できる	0.85	26
考える	0.92	18
思う	0.18	18
感じる	0.91	13
知る	0.43	13
いく	0.28	12
調べる	0.62	7
違う	0.19	7
学ぶ	1.80	6
話し合う	4.58	5
運ぶ	1.68	5
持つ	0.07	5
受ける	0.21	4
つける	0.07	4
聞く	0.04	4

■ 形容詞	スコア	出現頻度
多い	0.19	8
使いやすい	2.34	5
楽しい	0.04	4
欲しい	0.04	4
良い	0.02	4
少ない	0.11	3
新しい	0.08	3
暮らしやすい	5.92	2
細かい	0.20	2
難しい	0.03	2
悪い	0.02	2
ほしい	0.01	2
いい	0.00	2
生きやすい	1.03	1
使いにくい	0.29	1

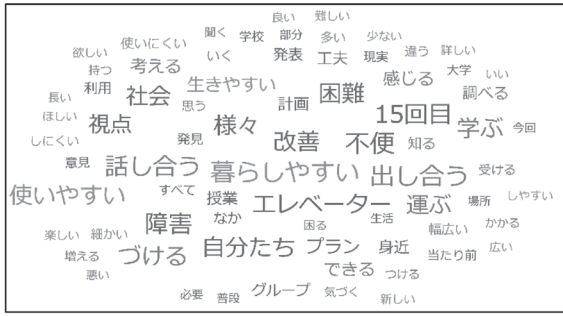


図 12 重要度が高い語のワードクラウド
文字が大きい程、重要度が高いことを示す。

次に各単語のつながりを見る共起ネットワーク分析を行い、学生がプロジェクトを通して何を学んだのかを図示化した（図 13）。共起が 3 つ以上の単語で示されているところと感想文を照らし合わせて見ると、次の学びがあったことが示唆された。

①グループ活動や発表は他者の話を聞くことで違う意見から様々な視点が得られ

た。その具体的なこととして、自分たちが学校における不便に思ったり、感じたりすることを基点に改善点を出し合っていた。

②授業を受けたり調べることで、当たり前に思っていたことが他の人にとっては困ることがあったり、困難を持つことに気づいた。

③①②を通して、使いにくいものや生活しにくい場所に気づき、それをどうすれば使いやすくして、生活しやすくしていくかを考えていく必要があると思った。また、自分たちでできる工夫があることにも気づいた。

④①②を通して、新しい発見や新しく見えてくる問題が多くあって、幅広い視点を身につけることができた。

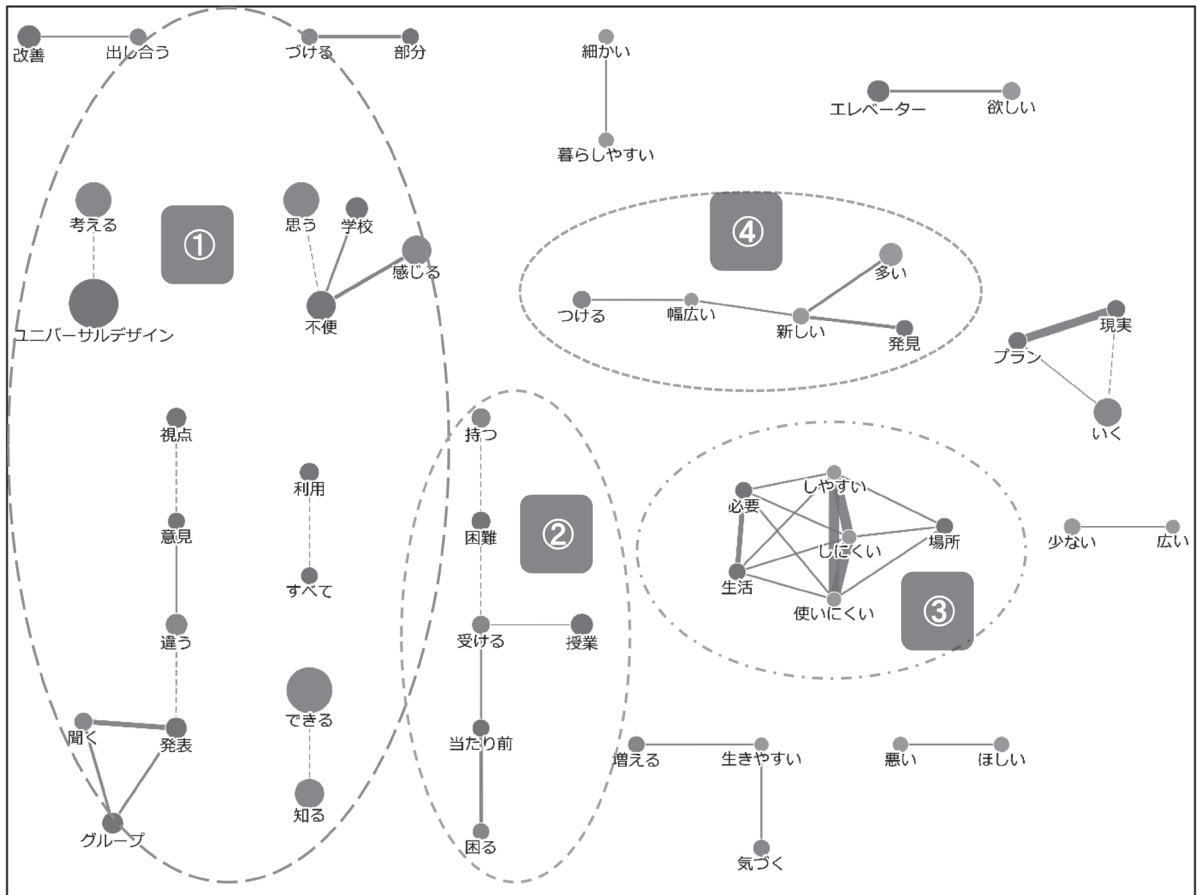


図 13 共起ネットワーク図

2. 対話への気づきとその学び

本プロジェクトは「障害児保育」の授業の一環として行われた。15回通して、授業冒頭の15分という時間であったが、ひとつのテーマをグループでじっくり考え、互いに考えや意見を継続的に出し合うことを保障していった。そのことにより、各回の授業内容と結び付けながら学生自身が思考を巡らせるまでに至ったと考えられる。また、15分で区切ることで、話し合いが途中であっても、次の機会までに熟慮する時間がある。それぞれの学生が考えてから、次の話し合いに参加するという状況が思考を巡らせることにもつながったと思われた。

それとは別に、意見や考えを出すだけでなく、他者のそれを聴くということが、自分の視野を広げていくことに学生は気づいていった。例えば、発表会で、他のグループが自分たちのグループと同じ場所や製品をセレクトしたとしても、その理由や改善点に違っている。それを知ることによって自分の視野が広がっていくことに喜びを感じていたようにも見えた。対話をするということは、互いに対等な立場で互いの違いを尊重し合うことを必須とする。そのためには、語ることよりもむしろ聴くことのほうが重視される。それは内容を理解するだけでなく、自分事として感じ考えることを意味する。学生の感想文にあった単語で15回目という言葉が頻出語でありスコアも高かった。15回継続して話し合うことや15回目の発表会で他者の意見を聴くことの意味が

実際の感想文には書き連ねられており、学生が“対話すること”を体得していったことが窺えた。

保育現場においては障害児だけでなく、その疑いがある子ども、外国にルーツがある子ども、家庭背景に複雑で深刻な問題がある子ども、性的違和を持つ子どもなど、様々な社会的障壁にぶつかる子どもがいる。もちろんそうでない子どももいる。そのなかで、一人ひとりが自分の思いや意見を表明し、互いの違いを尊重するインクルーシブ時代に既に突入している。そこでは、「こういう子どもならこう」というノウハウは通用しない。学生たちが対話のプロセスで、「環境を変えるだけでなく、自分たちの他者への意識を変える必要がある」と気づいたことは、今後の保育者としての在り方に大きな貢献をしたのではないだろうか。なぜなら、保育は子どもと同僚と絶え間ない対話によって創出されるのだから。その対話の大切さに気づいた学生の姿に、筆者自身も改めてこの保育者養成の授業で対話を軸とした内容を構成していくことの重要性を知ることとなった。専攻科の学生には深く感謝するとともに、これからの活躍を心から祈っている。

【脚注】

注1) 「ノーマライゼーション」は、デンマークのニルス・エリク・バンク・ミケルセンにより提唱された「障害の有無や年齢、社会的マイノリティなどに関係

なく生活や権利が保障された環境を作っていく」という考え方を指す。

注2) 愛知県立大学の三山岳氏は筆者と同様にインクルーシブ保育と保育者支援の研究者である。

注3) テキストマイニングとは、アンケートの自由記述回答やインタビューデータのテキストを対象に「文章を単語や文節、あるいは形態素といわれる品詞など『言語上、意味のある最小単位』で区切ることで、出現頻度、語句の相関関係、時系列による変化などの傾向やパターンなど、有用な知見を抽出する。」3) 分析である。

注4) テキストマイニングでは、出現回数だけでなく、その文書で出てくる語の重要度を一般に示す。なぜなら、一般文書で出てくる頻出語はその文書にとって特に価値はなく、頻出しなくても調査対象になった文書では価値が高い場合があるためである。スコアとは、出現回数と語の重要度を合わせ、TF-IDF という統計処理

によって算出される。

【付記と謝辞】

本報告は2022年度専攻科こども教育専攻の学生の協力のもとに作成されました。授業内の写真や資料の掲載については承諾を得ました。心より感謝申し上げます。また、プロジェクト発表会に参加してくださった愛知県立大学三山岳氏にも深く感謝申し上げます。名前とコメント内容、写真を掲載することに快諾をいただきました。

【文献】

1) 講談社 SDGs

<https://sdgs.kodansha.co.jp/news/knowledge/40879/> (2022.11.8 アクセス)

2) UD 資料館 JTSUKEN

<https://www.ud-web.info/born>
(2022.11.8 アクセス)

3) IT トренд

https://it-trend.jp/words/text_mining
(2022.11.12 アクセス)

【巻末資料】ユニバーサルデザイン予算案(仮) <みみましこグループ>

項目		予算額 *3	決算額 *4	比較増減	備考欄
管理費 *1	集金費 *2	150,000			予算を増やすための工夫が必要か?
購入費	段差プレート	2,000	1,528	472	
	黒カーテン	3,000	2,500	500	
	上下式黒板	140,000	264,000	-124,000	
	送料費	5,000	660	4,340	
	合計	150,000	268,688	-118,688	

*1 管理費とはユニバーサルデザインを配備するための財源を意味する

*2 元々どれくらいの財源が分からないため、不足分は集金(施設改築のための集金及び募金)で賄う

*3 *4 予算額は自分たちで予想した金額、決算額は調べてみた見積り額を示している。